真・恋姫†無双ＯＲＯＣＨＩ

フォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　ＯＲＯＣＨＩ

【Ｎコード】
Ｎ７０４４Ｙ

【作者名】
フォン

【あらすじ】
初めて小説書きます…

一刀と及川の親友であるオリ主が遠呂智になって恋姫世界で頑張るお話
主人公陣営には恋姫で登場しなかった史実の有名な将をガンガン入れていきます
めざせ、完結！

海藤遊星（前書き）

本文書くより投稿することの方がくせ者

この小説には
オリジナル要素
少しのキャラ崩壊
が含まれます

ご注意ください

海藤遊星

「……はぁ」

俺は海藤遊星。聖フランチェスカ学園に通ってるただの学生さ
親友の一刀みたいにエロゲにいそうなイケメンな面はしてねーし
及川みたいにキャラが濃い訳でもネェ

俺が勝てンのは学力と身長だけだ
……ルックスェ…

でだ。
今俺はガキににらまれてビビってるのさw
なんつーか、ガキの周りの気が全然ちげぇ…
めんどくせぇ…

「まぁ、いいだろう…」

ガキが呟いたのと同時に俺の視界は何も見えなくなったんだ…

ゆうせいは　めのまえが
　まっくらに　なった

……レポートしてぬぇ…

「……起きろっ！」

ぐはっ！

「起きたな（物理）」

「いいなぁ…左慈に蹴られるなんて…」

腹部に痛みを孕みながら身体を起こす俺

目の前にはあの時のガキ

そしてもう1人誰かいるな…

とりあえず

ここ…どこだ？

邂逅、左慈と于吉

やあやあ、遊星だよ

いま俺がいるのは
地面が透明、空は不思議な色合いをしている亜空間とも言うべき所か
…ゼロ時間かよ…

まぁ、それよりもだ
「俺は左慈。そしてこいつが「左慈の永遠の恋びｔあべっ！」于吉
だ」

美しい裏拳を決めながら自己紹介をした左慈

えと…俺は海藤遊星

とりあえず自己紹介

「遊星、貴様、北郷一刀は知ってるな？」

「ああ、一刀は俺の親友だてか、待ってくれ！
ここはどこだ？あんたら左慈と于吉って言ったよな？それって三國
志のあのか？いやいやいや…まさかゲームや小説でもあるまいし…」

「うるさいやつだな…」
左慈がぼやく
「まぁまぁ左慈。遊星はなかなか頭がきれる人間です。私が言葉で納得させますから、殴るのは私だけにしてください」
そう言うと于吉が俺の目の前に飛んできた
蹴られたのか…
「ハァ♪左慈ったら激しいんですから。さて遊星、あなたの質問に答えましょう。私達はあの左慈と于吉です。ただし、三國志のパラレルワールドで、のですがね。」

パラレルワールド！？
たしか平行世界だかｉｆの世界のことだよな…
「話を続けますね。そのパラレル三國志に北郷一刀がイレギュラーとして入ってしまったのですよ
それによって史実と違う結末で魏が統一してしまうのですよ。」
一刀なにやってんだ…
史実と違う結末…？
「例を挙げれば、赤壁の戦いで曹操が負けず、そのまま天下統一します。」
は？
赤壁っちゃあ映画にもなる大決戦だよな
史実と、違う未来か

一刀のせいで…

「そこで貴方に、歪んだ歴史を戻して欲しいのです。分かりますか？」

なるほど、だから俺はここにいると

「俺に！？どうすりゃいいんだ！仮に方法あっても、俺なんかが出来るわけないって！」

正直、こういう異世界召喚モノは大好きだけど、自分が主人公でだなんて、無理に決まってる。

「わかってますよ。あなたに乱世を生き抜く力がないことぐらい。北郷一刀は主人公補正なるもので運良く曹操に助けられ、常に周りには彼を慕う人物に溢れていました。が、貴方は未知数。どうなるかは私達も知りません。なので貴方に力をあげましょう。」

「……」

俺は黙ってしまった。

俺の中の好奇心が今爆発している。アドレナリンが湧き出ている。オラ、ワクワクしてきたぞ！

「この話、受けますよね？」

「……受けるよ」

俺はそう言った

信じられない話だがな

「よかった。あなたが受け入れるまで帰さないつもりでしたから。私としても左慈との愛の空間に遊星がいても邪魔でして。それでは左慈、仕上げdあべしっ！」
「死ねっ！」

また于吉が飛んでいった

「さて遊星、行くからには相応の覚悟が必要だが、分かってるか？」

うん…これから行くのは血の臭いがする見知らぬ世界

「分かっているッ！」
力強く言った

「ふん…その覚悟、本物であるかどうか…確かめさせてもらうぞ」

俺の目の前に青竜刀が現れた！
ええええええええ
これが仙術かよ
チート乙

そして目の前に1人の兵士
そいつを、倒してみろ

左慈はそう言ったんだ…

やるべきことは

「ま、こうなるか…」

兵士が剣を振りかざし突撃してきた！
青竜刀を手に取る。
ひんやりとした金属の感触うう…生々しい

「けどさっ！」

兵士の剣が振りおろされる
見切ったァ！
身体を右へ反らし

切り裂く！

青竜刀が兵士の顔を薙ぐ

兵士はそのまま倒れた

「ふぅ」

チュートリアルでの戦闘でなんか、負けてられねーっつの

「ほぅ、お前人を殺すことに躊躇しないのか」

左慈が少し驚いた様子で口を開く

「ん？ま、いい気分じゃあねーが、そこんとこは割りきらねーとやってらんねーだろ？一刀は剣を持たなかったのか？」

戦国の世で剣をもたないなんてそんなわけ…

「あいつは直接人を殺めたことはない」

「竹刀なら黄巾のやつらに向けましたね。」

于吉おかえり…

一刀は優しいから流石だといいたいが…

甘いぞ一刀！

リバースカードをオープンしそうだ

「于吉、遊星なら能力をやっても大丈夫か」

「そうですね。遊星なら大丈夫でしょう。」

お？ついにか！？

キター（。∀。！）

「遊星、あなたに能力を差し上げましょう。どれがいいですか？」

？公孫淵

？金旋

？淳于瓊

？曹爽

うわあ…

凡愚しかいねえええええええwww
つか能力をくれるんじゃなくて憑依じゃねーか…

「嫌だっ！司馬懿に「滅せ…」とかいわれたくない！
金旋…はまぁ性格俺ならなんとかなる…かもじゃなくて、地味すぎる！
烏巣で焼かれたくない！つかさせねぇ！袁紹に訴えてやる！！あ、
でも袁紹って優柔不断なんだっけ…
曹爽とかもう赤壁より全然後じゃねーか！何より凡愚だろあいつ！

（その時遊星に電流走る）

そうだ遠呂智にしてくれ！今考えついた！」

「今の選択肢は冗談ですよ。マジレス乙ww」

イラッ☆（＾ω＾＃）

「とまぁ、遠呂智ですか？いいですけど、大変ですよ？では…」
「ふぅっ！」

左慈と于吉が俺に術をかけているのだろう。体が青く燃えだした。
なにこれこわい

青い炎が体を燃やし尽くしたと思ったら、
「うお！？」

体から力が湧いてくる。

炎が消えてゆくのと同時に俺の体に鎧、兜、脛あてなどが現れる。
すべての炎が消えた。
そっと目を開く。

「すっげぇ…」
俺はまさしく遠呂智になっていた。俺自体が変わってるのは、気というか、体から感じる力だけか。肌もグレーになってないし。于吉が鏡を出した。お！オッドアイになってる！俺カッコイイ！
足元には遠呂智の武器　死神鎌「焦喚」が置かれている。

「さて、あとは乱世であなたが歴史を正せばよいだけです。」

「おう。具体的には何をすればいいんだ？」

「そんなの決まってる。」
左慈がだるそうに言う

「北郷一刀を…消せ」

出会いは殺伐と（前書き）

よく見たら私かなり文章すくないですね…
次からたくさん生産します…

出会いは殺伐と

ま、こうなる可能性はわかっちゃあいたが…

「……分かったよ」

「ならもう行け。于吉」

「はい、左慈」

于吉が術を唱えた

「いいですか？しっかり北郷一刀を消すのですよ！わかりましたね！」

「于吉、一刀に恨みでもあんのか？妙に感情的だな」

俺がなんとなく問う

「ええ！あの泥棒猫はっ！左慈と2人きりで！夜中に外でキャッキャウフフとイチャついていｔ（ごふっ！）」

「もう死ね！」

「…ぜぇぜぇ…左慈もっ！私に見せたことのない顔でっ！ぐぶっ！あの男とっ！一夜を過ごしたと思うとっ！あっ！左慈そこはダメですってば…ぁぁ…」

「于吉…お前のこと、忘れないぜ…」そこで俺は謎の空間から姿を消した。

ぶわりと風を吹かせながら俺は着地した
どうやら本物の大地にきたらしい。ここが後漢の中国なのか

「貴様いま何をした！」
突然後ろから声をかけられた
「ん？」
振り向くとそこには剣を構えたすごいべっぴんさんが。ほえ～中国にはこないな美人がおるべか…
剣士だからだろう、ブラウンの髪はまとめられていて、おろしたらまた綺麗だろーなぁ
鎧とドレスを合わせたようなものを身に付けていて、手にもつ剣からは…あんまりいいオーラはないな？なまくらよりはという感じ
どっかでみたことあるような…
「沈黙か、それでもよい、すぐに切り捨ててやる…ハッ！」
女剣士が突っ込んでくる！いい気迫だ。だがあんたには何より

ガギィン！
「なっ！」
容易く受け止めた俺に驚いたのか、表情が変わる。かわいい。

速さがたりない！
そのまま剣を弾く

キィン

「ふっ！」
かわいい剣士は俺から距離をとった

「ああっ！トランザムも出来るようにしてって言うの忘れてた！」
「は？」
再び困惑する戦乙女（仮）さん。美しい

「我は遠呂智。この国を変えに降臨せし魔王」
遠呂智様っぽく言ってみる
「降臨？もしや天の御遣いか？いや、天より来たのであれば死神鎌なぞ持つはずがない。やはり妖術で人をたぶらかす妖魔なのだろう！ここで成敗する！」こいつ脳筋かｗｗ

「貴様…私を笑ったな！？生きて帰れると思うなよ！」
え？表情には出してないのになぜ分かったし！？ポーカーフェイスの神（自称）の俺が読まれるとは…まさか！？ニュータイプか！

「はあっ！瞬迅剣！」
んおお！？
強烈な突きが俺のいた場所を貫く。なるほど、魔神剣より瞬迅剣派か

「次はこっちの番だな！」

鎌を振りかざし…

「チャージ１！」

そのまま地面に打ち付ける！

地面に衝撃波が走りそのままかわいい娘を吹き飛ばした！

嫁にしたい娘（もはや誰だ）は木にぶつかってそのまま動かなくなった…

「ああっ！やりすぎたか！？」

どうやら身体能力も爆発的に高まってるみたいだな。考えてみれば瞬迅剣を俺がよけられるはずがないし。

よしまずは嫁（違います）を休ませてあげよう。

はっ！これは！

宿まで…

？おんぶしていく

？お姫様だっこ

？引きずる

？無視する

うおおっ！

また鬼畜な選択肢がぁっ！お姫様だっこだと！？俺を萌え殺す気か！

？？は鬼か！サドの魂は俺にはない！

「…おんぶだな…」

よいしょと
良かった、そんなに怪我はなさそう…ん？
なんということでしょう

「胸…ないな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7044y/

真・恋姫†無双 ＯＲＯＣＨＩ

2011年11月24日19時53分発行